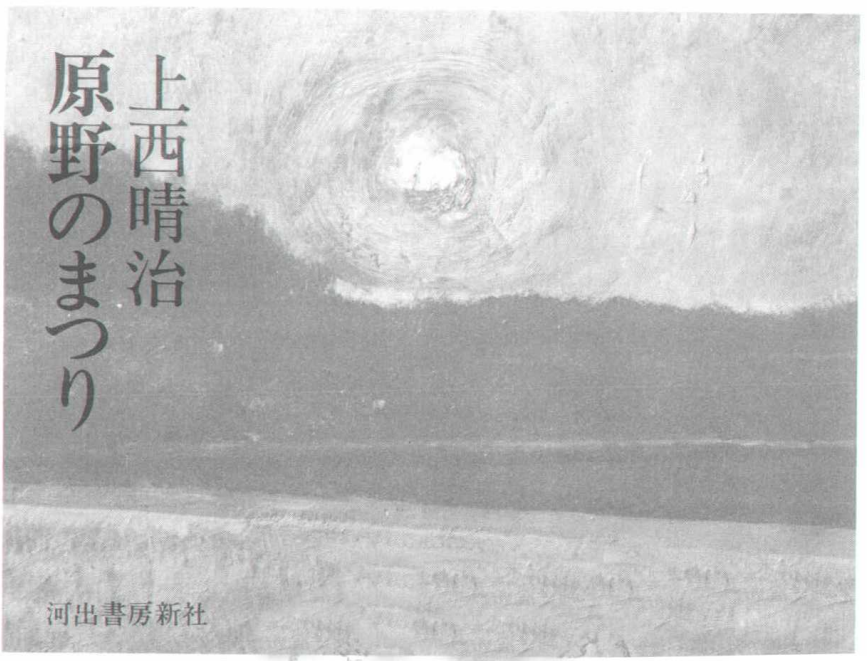
原野のまつり

上西晴治



原野のまつり

上西晴治

河出書房新社

原野（げんや）のまつり

© 1982
Printed in Japan

一九八二年一月一六日　初版印刷
一九八二年一月二五日　初版発行

著　者　上西晴治（うえにしはるじ）

発行者　清水　勝

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　営業　〇三―四〇四―一二〇一
　　編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印　刷　三松堂印刷株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

落丁・乱丁はお取替えいたします

目次

ニシパの歌　5
野鼠とオンネフチ　73
イム叩き　127
原野のまつり　177

装画　橋本　光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

原野のまつり

ニシパの歌

序

トンケシ山さ　熊が出て
馬がはねくり　牛のめくった
久造たまげて　腰ぬかす

イム婆が久造の家の傍を大声で歌って通り過ぎた。朝飯を食べ終って横座で一服つけていた久造は耳を傾け、自分の腰にちょっとさわってみて苦く笑った。いつも口から出まかせに歌って歩くイム婆である。脳天をたたきつけるように甲高く、尻あがりのおかしな節まわしは、七十を過ぎたいまも、昔と少しも変わらない。

イム婆は、ときどき立ちどまっては、丸めた背をのばし、窓の向こうに見えるかや原に消えて行った。

熊は今朝、はやばやと健作の手で為留められていたから、得意げなイム婆の歌が、久造はよけいおかしかったのである。

「あの大熊だもの、二、三頭の犠牲は当然のこった」

肉牛と馬を合わせて七十頭余もいたので、久造にとって、こんな被害は屁でもない。ひどい年には五頭もいちどに斃されたことがある。五頭斃されれば十頭増やすというのが久造の心意気だった。

久造は熊を為留めたという知らせを受け、トンケシ山の麓をとび廻っていたものだから、みんなより少し遅れて家を出た。刃わたり一尺二寸もある長柄の鎌を担いで、野良径をとんとんと歩いた。

すぐ右手には、唐黍の青黒い葉がそよ風にざわめき、その向こうの高みには馬鈴薯の白い花が点々とつづいている。久造は作物の順調な伸びに満足だったが、もっとはっきり確かめたかったので、そこから小径にそれ、二十間ほど草藪をこいで大排水の土手に這い上った。そこで太い深呼吸をひとつして、それからゆっくり体を捩じるようにしながら作柄を確かめていった。小麦、燕麦、大豆、亜麻、ビート、蕎麦、稲黍。十町歩もある畑の隅の方まではとても見えなかったが、打ち寄せてくる青い穂波や、ふくよかに盛りあがった葉っぱを見ては、つい心がはずんできて、じっとしてはいられなかった。

ちょうど通りかかった、赤い自転車に黒鞄姿の郵便配達夫に向かって、

「善作、見ろ、あたりはまぶしい満作だど」

腰を折って思いきり叫び立てた。善作はふり向きもしなかったが、吐き出した声といっしょ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に、はずんだ心が天高く跳ねあがって、いくらか落着きをとりもどすことができた。
「今年こそ、霜に追いつかれんべ」
つぶやいて大空を見上げた久造は、折りから雲を押し分け、かっと照りつけてきた真夏の太陽に眼がくらんでよろめいた。
「夏は、これが本当だべ」
暑さに喘ぎながらも、焼けつくような太陽がうれしかった。作物は眼に見えて伸びるし、刈り取った牧草は、みるみる乾燥する。あと半月もすれば、厚い穂波がたわわに稔り、太った牧草の草積がいくつも出来あがる。みんなお天道さまのおかげなのだ。
久造は、そのまま土手伝いに近道をして十勝川の岸辺に出た。すぐ足もとから牧草地が遠くどこまでもつづいている。百間ほど先のところを、馬に曳かれたモーアが勢いよく動きまわっていた。牧草を薙ぎ倒してゆく機械の音が草原に力強く響きわたる。
「やっとるわい」と思った。モーアの中央に腰を据え、姿勢を正した伜の健一が、ときどき手綱をふりあげるようにして馬の口をしゃくった。
刈り取られたオチャードの畝が、幾十本、幾百本となく大きくうねりながら、蓬の生え繁った向こうの排水の縁まで行儀よく並んでいる。午後になればレーキテッター、ヘレメーカーといった機械が馬に曳かれ、唸りをたてて平原をかけまわるのだ。女房のハルと娘の恵美子が、機械の入らないでこぼこの多いところを、長柄の鎌で刈っていた。
今日一日でオチャードの五劃を刈り終れば、明日はチモシーの三角畑と旧川沿いの低地の大半が片付くかも知れない。仕事は順調だし、この天候なら途中で多少ぐずついても一葉たりとも腐

らさずに、上等な牧草を仕上げることができるだろう。五十の草積と、はち切れるほどに詰めこんだ三つのサイロがあれば、どんな大雪がきてもまごつかずにすむ。

「どっちりしたもんだい」

久造は大きく胸を脹らませ、長柄の鎌をさっとふりおろして蓬の頭をちょん切った。丸々と肥えた七十余頭の牛馬が、彼の頭の中を元気にはねくりまわっていた。

さっと涼風が通り過ぎて、久造は感慨深げに再び広い牧草地を見渡した。四、五年前までは、浜部落から大勢の出面を雇ってきて、ひと鎌、ひと鎌、長い日数をかけ、手に大きなマメをいくつもでかして刈ったものだ。体から焦げた煙がいまにも吹き出してくるかと思われるほどきつい毎日だった。

草刈りや草乾しから草積積みまで、終日休みなく、働いても働いても仕事の山が追いかけてくる。久造は小学校に入ったころから、もう草乾しにかり出されてどやされた。

「草積入道がでかい口をあけて、こっちさ向かってくる」

うだるような暑い夏の日、汗にまみれた久造はこう口ばしって、とうとう牧草畑の真ん中でのめくってしまった。

「草積入道だと、寝言ばぬかしくさって」

父の与平が、鎌研ぎ用に汲んでおいたバケツの水を、いきなり頭からぶっかけて叫んだ。

「目玉ば、ばっちりあけて見ろ、おめえのまわりには、草積入道よりおっかねえのが、うようよしてるだど」

四囲の景色は激しく揺れ動いていたが、久造の耳に与平のことばがはっきり聞こえた。一瞬、

久造はちぢこまった。与平の眼が額の方まで吊りあがっており、周りには大勢の人がどよめいていた。

「気ば許すな、和人(シャモ)が狙ってるだぞ」

その後もしじゅう与平が口にすることばだった。

与平はアイヌの子としてこの地に生まれた。暮らし向きがよくならなければ税(うだつ)が上がらなかったので、発奮して牛馬を増やし、土地を拡げていったが、いつも和人の白い眼にさらされていた。ひきずり落とそうというのだ。しかし、和人の侮蔑を受け、みじめな思いをして育ってきた与平は、どんなことがあっても和人を凌いで、部落の上位を占めていなければならなかったのである。

久造はさっきから、十勝川の岸辺にじっと立ちつくして、働きずくめで死んでいった父のことを思っていた。

1

二つの牛が　五つに増えて
三つの馬が　七つになった
ニシパよろこんで　腹つき出した

これだけ財産を増やしたのだから、イム婆にニシパ（親方）と呼ばれて当然だし、誇っていい

ことだと与平は思った。
与平は父ヤエレケから、わずかな牛馬と少しばかりの土地を譲り受けた。その頃、生き物や土地を所有するアイヌはごく稀れだった。与平の知るところでは、浦幌太のイトモ、旅来のヤンケくらいなものである。殆どがその日暮らしの生活なのだ。
「獲って食べるだけでは、これ以上の力はつかねえ。わんつかずつでも貯めてゆかねえと、いまに根こそぎ野郎どもの餌になってしまうど」
こういってヤエレケは眼を落とした。与平は十勝川で柳葉魚や鱒や秋味を獲りながらも、ヤエレケの遺言を腹に収め、譲り受けたもと手をしっかり握りしめて、少しずつ財を増やしていったのである。
与平はニシパと呼んでくれたイム婆に感謝している。イム婆はまだ四十を過ぎたばかりの年齢だが、さすがに普通の人間にできない所作をやってのけ、神降しをするだけの値打ちがあると感心した。イムは相手の言動と全く反対の言動をするアイヌ婦人独特の精神病で、これは老婆に多かったから、この若い年齢で、みんなはイム婆と呼んでいる。与平はイム婆につけてもらったニシパの名をぐんぐん盛りあげてゆかねばならないと思った。
「アイヌのくせして」
牛馬や土地をたくさん所有するのは怪しからん、と和人たちが騒ぎたてた。しかし、与平はそんな誹謗にはいっさい耳をかさずに、ただ黙々と働いた。朝は日の出前から、晩は手元が見えなくなるまで、雨の日も休むことがなかった。ひどい嵐の時でも、雨合羽を着た与平が畑の中にうごめいていた。盆も正月もなく、子供たちは冬でも裸足で過ごした。

「いざというときぁ、銭がものをいうだ、もうちょっこらの辛抱で土台ががっちり出来あがる。そうなりゃ、手袋でも足袋でも二足重ねて履かせてやるべえ」

与平のはもうひとつの手ごわい敵があった。冷害である。しかし、彼はこの抗し難い巨大な自然にも敢然と立ち向かった。春が遅く、秋の殊更早い十勝では、寒さに強いものを選んで作る。しかし、それでも早春の氷雨に悩まされ、初秋の霜に打ちのめされた。

「明日の朝は、ぶ厚い霜が来っど」

終日吹き通した西風が日没と共にあがって、星がまばゆく輝いている。ギッと骨に応える寒さだった。与平はあきらめきれぬ心をおさえ、刈り残した大豆畑の真ん中にいつまでも立ちつくしていた。堅く実のしまった大豆だが、厚い霜ならひと朝でふやけてしまうのだ。

「やるまでのことだべ」

与平は短柄の鎌をさっとふりおろした。枯れ蓬が鈍い音をたてて薙ぎ倒された。力のこもった最初のひと鎌につられて、白刃が次第にきらめきを増してゆく。刈り取られた蓬の小畝がみるみる長く延びていった。彼は女房のかよをふりかえって顎をしゃくりあげた。刈り草を集めろというのだ。

その晩、与平とかよは朝まで一睡もせずに、刈り取った蓬を燃やしつづけた。火の輪が大豆畑を取り巻いて、灰色の煙が星空を焦がした。風の向きが変わるたびに、かよは火の種を持って畑の端から端につっ走った。

「あっちだ」

与平にどやされて、かよは息をきらして向こうの方に走る。
「こっちさ来お」
与平が鎌をふりあげて叫び立てる。風が渦巻いているらしい。与平がひと晩じゅうがなり立てれば、かよもまたひと晩じゅう蓬を抱きかかえて走りまわった。
白い空にトンケシ山の稜線がくっきり浮かびあがると、二人は煤けた顔を見合わせて太い溜息をついた。烏の群がひとつ、ふたつ浜部落の方に向かって飛んでゆく。
「あーあ」
与平が排水の縁にごろんとひっくりかえった。
「大豆ば生かして、おらを殺すとか」
かよがのめるように与平の脇に転がった。二人はそのまま正体もなくぐっすり寝込んでしまった。木枯しが立って潮のような与平の鼾が時折りかき消された。
太陽がトンケシ山の端を走っていた。八時を少しまわっている。太い霜柱が小径の両側にぞっくり立ち並んでいて、陽が高く昇っても崩れそうにない。それを踏みつけて、岩吉と正治郎が立ちどまった。与平の大豆畑がすぐ眼の前にある。蓬の燃え滓があちこちにくすぶっていて、焦臭いにおいがあたりいっぱいに漂っていた。岩吉が排水を跳び越えるなり、大豆の莢をむしり取って勢いよくひねった。ぱんと音をたててはじけ、丸い実が手の平に転がった。皺ひとつない艶やかな豆である。
「部落じゅう全滅だっちゅうに」
与平の処だけ霜からのがれたのがよほど癪にさわったらしく、岩吉は手の平の大豆を人差指で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com